

は、小にしては私にとって、大にしては国文学界にとって惜しみてなお余りあることである。

しかし、先生の業績は、長く学界に寄与し、また、私の思い出の中にある。弟子として慰められるのは、古典文学大系中の「太平記」「椿説弓張月」校注の大業が畢られ、それを繙くことよって、先生の御講義ぶりが偲ばれることである。(昭和二十九年三月卒、京都市立洛南中学校教諭)

後藤丹治先生を偲ぶ

長 田 久 男

昨年十月、先生が大阪学芸大学を停年退官なさった直後のことである。先生は、大槻文彦博士が大言海の編纂を始めたのは六十六才の時であったという例をお引きになって、今後の予定のお仕事を指折りかぞえ、「この勘定ではまだ十年は生きていなければならぬ。」とおっしゃったことがあった。

日本古典文学大系(岩波書店)第二期に、「曾我物語」の注釈をなさるはずであった先生は、その仕事の助手を私に言いつけられ

た。そのため、私は、先生にお目にかかる機会が多かった。世間話しをめつたになさらなかっただけに、先生が折にふれてお話しくださったことには、かえりみて味わうべきことがらが多い。

古典作品の注釈の仕事が難事業であることをおっしゃったことがある。その時、私は注釈について無遠慮な質問をした。すると、先生は、注釈におよそ三つの段階のあることを指摘された。第一段階は、現代語に言いかえる程度の注釈、第二段階は、その作品の成立した時代の言語意識をとり入れた注釈、第三段階は、作者の言語意識、表現意識に即した注釈の三つである。第三が目標であることは無論である。古典文学大系の第一期でなさった「椿説弓張月」の注釈は、この第三段階に近いものと、その時のお話から推察した。

「曾我物語はどの段階ですか」とお伺いしたら、「第二と第三の中間位かな」とおっしゃった。そして、「いずれにしても第三の段階の注釈は難事業である。しかし、後世に残る注釈書をかきたいものだ。」とおっしゃった。「戦記物語の研究」を専攻していなかった私が、こうした仕事の助手を言いつけられ

たことは、過分のことであり、かつ、ありがたいことであった。不肖の弟子というべきだろう。広島高等師範学校を終えて京都に勤務していた私は、立命館大学の大学院に学び、先生に平家物語の講義と太平記の演習とをうけた。和讃混淆文についての国語学的考察に関心をもっていた私には、先生の講義と演習は感銘深かつた。「戦記物語の研究を専攻してみないか」と先生にすすめられたことがある。一回は大学院のとき、一回は平家物語注釈のお手伝いにかけていた頃である。二回とも、「国語学を専攻したい」とお答えした。その後はすすめられなかつた。むしろ国語学の研究にいろいろのヒントを与えてくださったのもその一つである。「文章語の研究にも関心を持って」とおっしゃったのもその一つである。先生が戦記物語の語彙辞典の編纂に関心と計画をお持ちになっていらつしやることを知ったのもその頃である。

先生に最後にお目にかかったのは、本年四月十三日(土)の午後でした。退官記念の出版「国文学叢考」に「謹呈」と記して二冊くださつた。それを前にして、御自身の研究歴について思い出ふうにお話しくださった。そ

の中で、「私の研究方法は若いときからあまりかわっていない。」とおっしゃった。進歩がなかったとひかええめにおっしゃったお言葉を、私は「先生の今日の学風の基礎は若くしてすでにできていたのだなあ。」と感銘深くうけたまわった。

「余生の許す限り、私は奮起して、自己の学問を充実させねばならぬと思う」（国文学叢考の序）と記された先生に、天はその余生を許してくださらなかった。

大きな星が突然光を消したように、先生は突然おなくなりになった。悲しみの中にあつて、折々にお話しくださったお言葉をいくつか記して、私は先生をお偲び申し上げることとした。（昭和三十二年七月大学院卒、京都市教育研究所員）

後藤先生を偲ぶ

松井 松太郎

後藤家には先生の長逝を伝えきいて駆けつけられた親族縁者の姿がぼつぼつ見え、若い僧侶が静かに読経しておられ、先生は万巻の

書の間埋れて安らかに瞑目しておられた。親しみ深いその童顔は平常とかわらず艶艶しておられるので、枕頭にすがつて勉強不足をおわびしたかった。先生は岩波書店の日本古典文学大系の著述に寝食のいとまをも惜しんで没頭されていたから、出版を一日も早く完成されるまでは決してお邪魔してはいけなさと、一人ぎめしていたので、きつと甚だ不勉強になったものと思召しておられたかも知れぬ。こんなに急逝されるのが天寿であられたのならば、もつとしげしげと御垂訓を賜わりに御伺すべきであつたものと口惜しまれる。先生は常になく眼鏡をはづしておられ眼窩に強く眼鏡のあとが残っていた。日頃温和であられた御気性も、真理を追求されようとするときは文学の鬼だ。あの眼鏡の底から叱正された学生時代を思いだす。叱られることがなければオーソドックスの道は何事でも成就しがたい。学部入学早々の演習に兩月物語序文解があたり、教壇に上つてぎこちなく語るのをにこにこ聞いておられた先生は、後刻に誤れる点を指摘され冷汗三斗の思いがしたが、これが先生に叱られはじめだった。爾来、原拠出典資料をみつづける度ごとに鬼

の首でもとつたように先生宅の門を叩くのだが、根拠のない妄説はすべて通じない。誉められるような事は十に一つだ。或る時、秋成の雅号について「桐一葉散つて天下秋也」を秋成が何かに引用しておりますから、この言葉が気に入って、自ら秋成と号したのでしようと思ふに上ると、論拠不十分としてしりぞけられるといった具合なのだ。又、ある時、知人の子が専門部を受験するにつき、成績が悪いので是非入学させて頂きたい旨を御願してみると、自分の力で受験して下さいとおっしゃつて、この時ばかりは先生の楕円形の眼鏡が四角に化したと思われる程、厳正なお気持を示されまして、はじめて先生の真価に接した気が致しました。卒業論文諮問会では、先生から、主論文より副論文（二百枚）の方ができていると評していただいたが、叱られたことの大きな部類に属するものであろう。さて、私は商家の長男、家業を継いでゆかねばならなかつたので、先生より助手に残るようお言葉を賜つた時には、眼がしらが熱くなる程嬉しかったが、運命にさからわなかつて、今は染物屋のあるじ、本の読みたい時には、えてして十露盤をはじかね